

松 山 大 学 論 集  
第 27 卷 第 1 号 抜 刷  
2 0 1 5 年 4 月 発 行

## 松山大学経済学部新入生プログラムの効果測定

—— 自尊感情への影響を中心に ——

熊	谷	太	郎
松	井	名	津
安	田	俊	一

# 松山大学経済学部新入生プログラムの効果測定\*

—— 自尊感情への影響を中心に ——

熊 谷 太 郎<sup>†</sup>  
松 井 名 津<sup>‡</sup>  
安 田 俊 一<sup>§</sup>

## 1 は じ め に

文部科学省の学校基本調査によると、短期大学も含む大学進学率は2004年にはほぼ50%に、その後2009年には4年制大学単独の進学率も50%を超えることとなった。その一方で入学者数の指標である18歳人口は減少し続けている。人口減少による入学者数の低下に対応するため、大学生の70%余が通う私立大学はもとより国公立大も様々な入試制度を導入し入学者を確保しようとした。その結果、大学教育の現場だけでなく、日本社会全体で「学生の質の低下」が問題として取り上げられる事態となっている。こうした「質の低下」論にはやや感覚的な印象論も含まれていると思われるが、18歳人口の半数以上が大学に進学するという状況の中で、大学の教育現場は従来とは質の異なった学生と真正面から取り組む必要に迫られているのは間違いない。

松山大学経済学部では、こうした事態に対処するため1年生向けの少人数クラスである「一般基礎演習」の希望クラスを対象に、オリエンテーションプロ

---

\* 本研究は2013年度松山大学教育研究助成の研究成果である。記して感謝の意を表したい。なお、あり得べき誤謬は全て筆者らの責任である。

† 松山大学経済学部教授

‡ 松山大学経済学部教授

§ 松山大学経済学部教授

グラム「松大生最初の一步：自分をみつめ、仲間を探そう」（以下「最初の一步」）を導入した<sup>1)</sup>。「最初の一步」では、入学直後の学生に対して「大学適応」、すなわち大学における仲間作り、居場所作りを目指した。

本稿は、今後こうしたプログラムを開発していくに当たって、現在のプログラムが学生に実際にどのような効果を及ぼすのかを検証することを目的としている。具体的には2013年4月13日・14日、および20日・21日の2日程で実施した「最初の一步」の参加者に回答してもらった事前・事後アンケートの結果を分析し、プログラム実施前後での参加者の主観的な認識の変化を調査することで、本プログラムが受講生のどのような側面に対して影響を及ぼしているかを分析する。

これまでの筆者達による分析では「最初の一步」の受講生には「コミュニケーション能力」「社会人基礎力」の分野で能力の有意な向上がみられ、「学校適応」の分野でも能力の向上がみられることが明らかになっているが<sup>2)</sup>、本稿では主として「自尊感情」に焦点をあてた分析を行う。

自尊感情が他者との関わりや生活満足度にどのような影響を与えるのかについては、主として心理学の分野で研究が盛んに行われており、近年では子どもをめぐる社会的諸問題が顕在化してきていることから行政も着目し始めている。例えば、内閣府の「子ども・若者ビジョン」では、「自己を確立し社会の能動的形成者となるための支援」を理念の1つとし、「子ども・若者が、社会とのかかわりを自覚しつつ、自尊感情や自己肯定感をはぐくみ、自立した個人としての自己を確立するとともに、社会との関係では、適応するのみならず、自らの力で未来の社会をよりよいものに変えていく力を身に付けることができるよう、健やかな成長・発達を支援」するとしている。また、東京都（2009）

---

1) このプログラムは北森義明順天堂大学名誉教授が開発し、(株)ラーニングバリューが実施している「自己の探求Ⅰ」を本学の教職員がファシリテーターとなって実施するものである。このプログラムについての大学での実施事例と分析については山田ほか（2009）を参照のこと。

2) 松井ほか（2014）を参照。

による調査では、引きこもりやニートなどの背景に該当者の自尊感情の低さが原因である可能性があると指摘されている。子どもの自尊感情については、古荘（2009）が児童精神科医の立場から報告をまとめており、自尊感情を保てないままおとなになる子どもたちの増加と、その彼（女）らがそのまま大学生・社会に進出し、さらには親になることへの危惧を述べている。

豊田・松本（2004）では、大学生の自尊感情と関連する諸要因について分析している。分析対象は都内の大学生1～2年次生で、大学生活と関係する項目の分析結果として、自尊感情が高いと(1)大学生生活の充実度は高い、(2)友達から信頼される、(3)何でも相談できる友だちがいる、との結論を得ている。また、自尊感情の点数に応じて、高群・低群に分類しており、高群のほうが大学生生活充実度も高い群に属する割合が高いことを明らかにしている。鈴木（2002）は、大学生の精神的健康を自尊感情や主観的ウェルビーングを用いて分析している。その結果、自尊感情は学校生活や友人関係、全般的生活の満足度や快感情と正の相関があり、不快感情等とは負の相関があることを明らかにしている。また、自尊感情が高い者は、それが低い者と比較して、他者理解（他者の心理状態を正確に把握する力）、自己指向的情緒反応（他者の心理状態に対する情緒反応傾向のうち、自己に焦点の当てられたもの）、被影響性（他者の心理状態に対する感受性、巻き込まれやすさ）が高くなるという結果を得ている。こういった研究から、自尊感情の高さは大学生活や友人関係に大きく影響することがうかがえる。

自尊感情は随伴経験（努力が認められる経験・成功体験）とは正の相関にあり、非随伴経験とは負の相関にあることが明らかとなっている（豊田（2006））。「最初的一步」は受講生自身がグループで課題解決をし、主体的に取り組むことが特徴である。また、随所に「ふりかえり」の機会が用意されており、自身の行動やグループの雰囲気把握し、グループ全体としてどう思っていたのかを共有することができる。そうした活動の中で、随伴経験を積むことが出来るプログラムであるため、グループワークの経験が自尊感情に正の影響を与える

ことが予測される。したがってこのプログラムを通して参加者の自尊感情が高まるかどうかを計測することで、プログラムが新入生の大学適応を促進するかどうかを推定できる。そのため、本稿では特に受講学生の自尊感情にどのような効果があったのかを中心に分析結果をまとめる<sup>3)</sup>。

本稿の構成は以下のとおりである。第2節で調査方法と目的を紹介し、第3節で調査結果を概観し解釈を与える。そして、第4節で結論と今後の課題を述べる。

## 2 調査方法と概要

### 2.1 調査方法

本研究では、2013年4月13日・14日、4月20日・21日の2日程で行われた「最初の一步」参加者からのアンケートから、自尊感情を対象とした調査項目10項目について分析を行う。アンケートでは自尊感情を測定する尺度として、Rosenberg (1965) の全般的セルフエスティーム尺度の星野 (1970) の邦訳に基づき、菅 (1984) がリッカート法による採点を用いたものを使用した。「ちがう」、「ややちがう」、「ややそう」、「そう」の4件法で、配当は1点から4点までで、得点は10点から40点に分布している。自尊感情の質問項目は以下のとおりである。

1. 私はすべての点で自分に満足している。
2. 私はときどき自分がまるでだめだと思う。\*
3. 私は自分にはいくつか見どころがあると思っている。
4. 私はたいていの人がやれる程度には物事ができる。

---

3) なお、このプログラムで収集しているアンケート項目は、自尊感情の他に Goldstein 他 (1980) が開発した若者のための50のスキルチェックリストから菊地 (2004) がソーシャルスキルを図るために作成したソーシャルスキル尺度「KiSS-18 (Kikuchi's Scale of Social Skills: 18 items)」と経済産業省が2006年から提唱している能力である、社会人基礎力についても調査している。

5. 私はあまり得意に思うことがない。＊
  6. 私はときどき、たしかに自分が役立たずと感じる。＊
  7. 私は少なくとも自分が他人と同じレベルに立つだけの価値のある人間だと思う。
  8. もう少し自分を尊敬できたならばと思う。＊
  9. いつでも自分を失敗者だと思いがちだ。＊
  10. 私は自分に対して前向き態度をとっている。
- ＊は逆転項目。

質問紙は、プログラム開始前に受講生に配布し、回答した後に回収した。また、2日目の終わりに再度質問紙を配布し、回答した後に回収した。有効回答数は195で、そのうち男性が121名、女性が74名だった。

## 2.2 記述統計

表1は自尊感情の記述統計を表している。平均値は個別に単純加算し、平均値を算出した。項目1, 3, 4, 7, 10については肯定的な質問であるため、そのまま加算しており、表では「肯定」と表現している。項目2, 5, 6, 8, 9については逆転項目であるため、反転後の得点を加算している。したがって、逆転項目についても得点が高いほど自尊感情の得点が高くなるようになっている。表では「逆転」と表現している。

表1を一瞥して分かるように、プログラムの受講前後では、自尊感情が肯定項目、逆転項目共に上昇している。

表1 記述統計

	事前平均値	事前標準偏差		事後平均値	事後標準偏差
自 尊	23.19	4.006	自 尊	26.74	4.239
肯 定	11.73	2.247	肯 定	13.04	2.423
逆 転	11.48	2.369	逆 転	12.71	2.547

### 3 調査結果

本節では、「最初の一步」が2013年度入学の松山大学経済学部生にどのような効果を与えたのかを検証する。まず最初に、受講者全体に与えた効果を検証し、男女で差があるかどうかを検定する。そして、各尺度の個別項目別に受講前後の平均値の差に着目し、変化の大きかった項目について検討を行う。最後に、自尊感情得点によって、受講者を高群と低群に分類し、その特徴を明らかにする。

#### 3.1 自尊感情に対する効果

表2は、自尊感情の各質問項目における受講前後の差である。項目8 ( $t(191) = .529, n.s.$ )を除いて、前後差はすべて1%有意だった。「最初の一步」プログラムは肯定項目・逆転項目にはほぼ関係なく、各項目の平均値を押し上げる効果があることがわかった<sup>4)</sup>。

表3は自尊感情の受講前後での差を表している。すべての項目の前後差は1%有意であった。自尊感情得点は上昇しているが、その内訳は肯定項目の上昇による押し上げが大きく、どちらかという逆転項目の上昇は小さい。

事前では肯定項目の平均値(11.733)と逆転項目の平均値(11.479)との差は有意ではないが、事後の得点差(肯定項目14.047と逆転項目12.714)は1%有意 ( $t(194) = -14.088, p < .01$ )である。したがって「最初の一步」は、特に肯定項目に特に働きかけるプログラムであると考えられる。このプログラムの最後のセッションは「プレゼントカード」というワークである。このワークは2日間同じグループで活動してきたメンバーにもっと自信を持って良い所や気がついて欲しいところをプレゼントカードに書き記し、手渡しをするという

4) 項目8(「もう少し自分を尊敬できたならばと思う」)の前後差が有意ではない要因は、『尊敬』の解釈が各人で異なったか、そもそも『尊敬』するまでに至らなかったかのいずれかだろうと推察される。しかし、今回のアンケートからは理由までは明らかにすることができない。

表2 各質問項目における平均値と標準偏差および  $t$  検定の結果 (前後差)

	事 前		事 後		$t$ 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
1	1.81	.583	2.50	.737	-11.742***
2	2.05	.784	2.56	.764	-8.759***
3	2.27	.686	2.87	.630	-11.241***
4	2.58	.658	2.86	.652	-6.130***
5	2.38	.742	2.68	.744	-5.144***
6	2.31	.697	2.54	.758	-3.792***
7	2.48	.663	2.85	.678	-7.275***
8	2.16	.716	2.13	.670	.529
9	2.58	.712	2.81	.678	-4.186***
10	2.60	.779	2.98	.709	-6.639***

\*\*\* :  $p < .01$ 表3 自尊感情, 肯定・逆転項目における平均値と標準偏差および  $t$  検定の結果 (前後差)

	事 前		事 後		$t$ 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
自尊感情	23.189	4.006	26.738	4.205	-13.054***
肯定項目	11.733	2.247	14.047	2.409	-14.088***
逆転項目	11.479	2.369	12.714	2.553	-7.145***

\*\*\* :  $p < .01$ 

ものである。カードには肯定的な言葉が並ぶことが多く、自分を客観的に肯定的な面から捉える効果があると考えられる。そのため、逆転項目よりも肯定項目に働きかける効果が大きいと考えられる。

### 3.2 自尊感情と性差の検討

表4は事前アンケートでの自尊感情と肯定項目・逆転項目の平均値を男女別にみたものである。自尊感情については、男子学生が女子学生よりも有意に



表4 自尊感情、肯定・逆転項目（事前）における平均値と標準偏差および  $t$  検定の結果（性差）

	男子学生		女子学生		$t$ 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
自尊感情	24.246	3.953	21.480	3.489	4.911***
肯定項目	12.212	2.260	10.959	2.010	3.881***
逆転項目	12.067	2.445	10.521	1.894	4.907***

\*\*\* :  $p < .01$ 

高い ( $t(189) = 4.911, p < .01$ )。さらに肯定項目 ( $t(189) = 3.881, p < .01$ )、逆転項目 ( $t(190) = 4.907, p < .01$ ) のいずれについても、男子学生のほうが女子学生よりも有意に高いという結果が得られた。この自尊感情における男女の平均値の差について、肯定項目と逆転項目のどちらにより大きな差があるのかに着目をする、肯定項目では1.253、逆転項目では1.546で逆転項目での男女差が大きい。「最初の一步」受講前では、どちらかという女子学生の方が自分自身を否定的にみる傾向にあるのだろう。

表5は事前アンケートに於ける各項目の男女差を示したものである。逆転項目では、特に項目2（「私はときどき自分がまるでだめだと思う」）、6（「私はときどき、たしかに自分が役立たずと感じる」）、8（「もう少し自分を尊敬できたならばと思う」）について比較的男子学生との差が大きい。一方、肯定項目である4（「私はたいていの人がやれる程度には物事ができる」）と7（「私は少なくとも自分が他人と同じレベルに立つだけの価値のある人間だと思う」）については、有意な差は観察されなかった。肯定項目については、3（「私は自分にはいくつか見どころがあると思っている」）と10（「私は自分に対して前向きな態度をとっている」）は比較的大きな差となっている。この原因は項目10と、他の項目との間の関係にあると思われる。男子学生については項目10と項目2、6、8との間に相関があるとは言えないが、女子学生についてはそれらに正の相関関係にあることが観察された<sup>5)</sup>。上述のように項目2、6、

表5 各質問項目（事前）における平均値と標準偏差  
および  $t$  検定の結果（性差）

	男子学生		女子学生		$t$ 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
1	1.88	.611	1.70	.519	2.154**
2	2.18	.792	1.84	.727	3.060***
3	2.41	.656	2.04	.676	3.730***
4	2.61	.716	2.55	.554	.583
5	2.47	.779	2.23	.657	2.266**
6	2.44	.709	2.10	.627	3.479***
7	2.55	.697	2.37	.589	1.964
8	2.29	.761	1.96	.588	3.336***
9	2.69	.734	2.40	.640	2.806***
10	2.79	.769	2.30	.701	4.418***

\*\*\* :  $p < .01$ , \*\* :  $p < .05$ 

8については男子学生より女子学生の方が得点が低く、しかも女子学生においてはそれらの値と項目10の間での相関が有意であることから、項目2, 6, 8における得点差が項目10の得点差に結びついたと考えられる。

「最初の一步」受講後のアンケート結果に基づく表6は自尊感情、肯定項目・逆転項目における性差を表している。すべての項目において、男子学生の方が女子学生よりも平均値は有意に高い結果が得られた。しかし、受講前と比較すると、自尊感情の平均値の差は小さくなっている。特に、逆転項目の平均値の差の縮小が著しい。逆転項目を中心にどの項目の差が小さくなったのかを以下で検討する。

表7は各項目における性差を表している。逆転項目について、受講前では有意な差があった項目2, 6, 8は受講後では6を除いて有意な差は観察されて

---

5) 相関係数はそれぞれ、.453, .407, .334で1%有意だった。

表6 自尊感情, 肯定・逆転項目(事後)における平均値と標準偏差  
および  $t$  検定の結果(性差)

	男子学生		女子学生		$t$ 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
自尊感情	27.512	4.229	25.487	3.970	3.322***
肯定項目	14.463	2.384	13.338	2.337	3.222***
逆転項目	13.050	2.670	12.149	2.237	2.427***

\*\*\* :  $p < .01$ 表7 各質問項目(事後)における平均値と標準偏差  
および  $t$  検定の結果(性差)

	男子学生		女子学生		$t$ 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
1	2.60	.812	2.32	.552	2.768***
2	2.63	.797	2.42	.702	1.858
3	2.94	.567	2.73	.708	2.187**
4	2.87	.682	2.84	.597	.311
5	2.73	.764	2.58	.772	1.324
6	2.63	.818	2.39	.615	2.090**
7	2.93	.668	2.70	.677	2.334**
8	2.17	.679	2.08	.657	.934
9	2.89	.681	2.68	.643	2.204**
10	3.12	.678	2.74	.703	3.752***

\*\*\* :  $p < .01$ , \*\* :  $p < .05$ 

いない。また、6についても有意な差はあるものの、平均値の差そのものに着目すると縮小していることがわかる。肯定項目では、事前では項目3と10が比較的大きな差があった。受講後では、いずれの項目共に有意差はあるものの、平均値の差は縮小している。一方、受講前では有意差は観察されなかった項目7(「私は少なくとも自分が他人と同じレベルに立つだけの価値のある人間だと思う」)については、受講後では男子学生のほうが女子学生よりも有意

に高いという結果が得られた。さらに、項目1（「私はすべての点で自分に満足している」）については男子学生と女子学生の平均値の差は拡大している。

自尊感情は随伴経験と非随伴経験の量によってその平均値は変化する（豊田（2006））。プログラム中のワークを通して、女子学生の方が随伴経験の量が多い、または非随伴経験の量が少なかったのかもしれない。随伴経験・非随伴経験の量についての測定は今後の課題である。

### 3.3 自尊感情の高群・低群の特徴

最後に、自尊感情得点の高い群（高群）と低い群（低群）に分類し、受講前の自尊感情、肯定項目・逆転項目、受講後の自尊感情、肯定項目・逆転項目の平均値にどのくらいの差があったのか、その差はどのような特徴を持っているのかに焦点を当てる。低群と高群はできるだけ比率が等しくなるように分類している<sup>6)</sup>。具体的には、受講前の自尊感情得点については23点を境としている。23点以下は受講生全体の54.5%，24点以上が45.5%だった。そこで、受講前については自尊感情得点が23点以下の受講生を低群、24点以上の受講生を高群とした。受講後の自尊感情得点については27点を境とし、27点以下は54.4%，28点以上が45.5%だった。そこで、受講後については自尊感情得点が27点以下の受講生を低群、28点以上の受講生を高群とした。

表8は受講前と受講後のクロス集計表である。表の（ ）内の数字は調整済み残差を表している。表から、受講前に高群に属していた受講生は受講後にも高群に属する割合が高い（ $\chi^2(1) = 35.322, p < .01$ ）ことがわかる。

次に、自尊感情低群と高群の特徴をもう少し浮き彫りにしてみよう。そのために、肯定項目と逆転項目についてそれぞれ低群と高群に分ける。

受講前の肯定・逆転項目については、11点以下の受講生を低群、12点以上

---

6) 受講前と受講後の高群と低群の人数の比率に偏りがいないかを調べるために、 $\chi^2$ 検定を行った。その結果、受講前（ $\chi^2(1) = 1.513, n.s.$ ）、受講後（ $\chi^2(1) = 1.482, n.s.$ ）いずれも高群と低群の比率に有意な差は観察されなかった。

表8 受講前と受講後のクロス集計表

		事 後		
		低 群	高 群	合 計
事 前	低 群	77( 5.9)	27(-5.9)	104
	高 群	27(-5.9)	60( 5.9)	87
	合 計	104	87	191

表9 受講前自尊感情低群のクロス集計表

		逆 転		
		低 群	高 群	合 計
肯 定	低 群	61(-2.6)	16( 2.6)	77
	高 群	27( 2.6)	0(-2.6)	27
	合 計	88	16	104

の受講生を高群とした<sup>7)</sup>。受講後については、肯定項目では14点以下の受講生を低群、15点以上の受講生を高群とした。また、逆転項目については12点以下の受講生を低群、13点以上の受講生を高群とした<sup>8)</sup>。

表9と表10は自尊感情について低群に属する事前104名、事後106名について、肯定項目・逆転項目に関する高低群のクロス集計を表している<sup>9)</sup>。

自尊感情が低い群では、肯定項目・逆転項目の両方が高い受講生は受講前後で存在しない。逆転項目に関して低群に属する受講生は受講前88名、受講後85名いる。その中には肯定項目について高群に属する受講生が受講前で27名、受講後で16名存在しており、この群における自尊感情の低さの主要因は逆転項目である可能性を示唆している。

7)  $\chi^2$  検定を行ったところ、肯定項目 ( $\chi^2(1)=1.890, n.s.$ ) と逆転項目 ( $\chi^2(1)=1.333, n.s.$ ) のいずれも低群と高群に有意な比率の差は観察されなかった。

8) 受講前と同様に  $\chi^2$  検定を行ったところ、受講後においても肯定項目 ( $\chi(1)^2=2.262, n.s.$ )、逆転項目 ( $\chi(1)^2=.415, n.s.$ ) いずれも低群と高群の比率について、有意な差は観察されなかった。

9) 受講前後で自尊感情得点高群に属する受講生については有意な差は観察されなかった。表については、資料に掲載する。

表 10 受講後自尊感情低群のクロス集計表

		逆 転		
		低 群	高 群	合 計
肯 定	低 群	69(-2.2)	21( 2.2)	90
	高 群	16( 2.2)	0(-2.2)	16
	合 計	85	21	106

実際に受講前と受講後の、自尊感情高群と低群の得点にはどのような差があるのだろうか。まず受講前で自尊感情について高低群にわけ、それぞれの群について受講前後の得点差をまとめたのが表 11 である。例えば自尊感情得点について言えば、受講前に低群に属していた学生の平均値は受講後に 4.394 上昇し、他方、受講前に高群に属していた学生の平均値は受講後に 2.54 上昇している。両群の平均値の差は 1%水準で有意 ( $t(189)=3.494, p<.01$ ) であるので、受講前後の自尊感情得点についての伸びは両群で異なる。つまり、受講前に自尊感情について低い群に属する学生の方がそれが高い群に属する学生より、平均的に伸びは大きい。

肯定項目・逆転項目における平均値の上昇についても両群で有意な差があるが、特に肯定項目に上昇の差が大きく、肯定得点の上昇が自尊感情の伸びの違いをもたらしている ( $t(189)=3.5124, p<.01$ )。

続いて、「最初の一步」プログラム受講後の得点に関して、同じように自尊感情について高低群にわけ、それぞれの群について受講前後の得点差をまとめ

表 11 受講前における群別平均得点差と SD および  $t$  検定の結果

	低 群		高 群		$t$ 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
自尊感情差	4.394	3.656	2.540	3.647	3.494***
肯定項目差	2.827	2.321	1.701	2.058	3.514***
逆転項目差	1.567	2.220	.839	2.556	2.107**

\*\*\* :  $p<.01$ , \*\* :  $p<.05$

表 12 受講後における群別平均得点差と SD および  $t$  検定の結果

	低 群		高 群		$t$ 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
自尊感情差	2.154	3.614	5.218	3.222	-6.129***
肯定項目差	1.740	2.203	3.000	2.167	-3.964***
逆転項目差	.413	2.420	2.205	1.972	-2.107***

\*\*\* :  $p < .01$ 

たのが表 12 である。

受講後に自尊感情が低い群に属する学生も、受講前に比較すると自尊感情得点は 2.154 上昇しているが、受講後に自尊感情が高い群に属している学生の受講前後での伸び 5.218 に比較すると有意に低い ( $t(191) = -6.129, p < .01$ )。肯定項目と逆転項目をみると、逆転項目での両群の差が肯定項目でのそれより大きく、逆転項目についての受講前後での伸びの低さ (0.413) が両群の違いを大きくしている。つまり、受講後に自尊感情が低い群に属する学生は、自尊感情得点そのものは上昇するのであるが、逆転項目の上昇が少ないことが原因で自尊感情が高い群との差が生まれてきているといつてよい。

まとめると、受講前に自尊感情が低い群では、プログラムの受講を通じて、主として肯定項目の得点が伸びることが原因で自尊感情得点が上昇し、その伸びは受講前にもともと自尊感情が高かった群よりも大きい。つまり受講前の自尊感情得点の差を縮めるようにプログラムは機能しており、本プログラムは自尊感情に関して積極的な効果をもたらすことが明らかになった。また、受講後の得点に着目した分類からは、受講後に自尊感情が低い群では、受講による逆転項目の上昇があまりみられなかったことが原因で自尊感情得点の伸びが低いことがわかる。すなわち、このプログラムで逆転項目が示す内容についてあまり改善しない受講生が存在する。その原因については今回のアンケートから真の原因を探ることはできない。今後、インタビュー調査などを行い、精査する必要があるかもしれない。

## 4 お わ り に

以上の分析から、導入教育としての「最初の一步」プログラムは、自尊感情を全体として高めることがわかった。一方、性差および個人によってその効果の大きさは異なる。また受講後の群別の観点からの分析では、逆転項目に関して伸びが比較的少ない受講生がいることも明らかになった。

はじめに述べたように自尊感情は随伴・非随伴経験から影響を受ける。したがって、「最初の一步」のようなグループワークを主体としたプログラムだけでなく、現在注目されている「アクティブラーニング」によっても積極的な影響があるだろう。そして自尊感情は自己効力感（外界の事柄に対し、自分が何らかの働きかけをすることが可能であるという感覚）に影響を与えることも知られている。

「現実に対して受身で積極性がない」とも言われる学生が自尊感情に基づいた自己効力感を身につけることは、本人の将来のキャリア形成だけでなく、大学の講義・各種プログラム・課外活動を活性化させるための基本になるであろう。今後は、本プログラムと自尊感情の関係をより深く検討可能なアンケートを検討し、それらの分析によって学生の成長にとってより資するプログラムをつくりあげていきたい。

## 参 考 文 献

- Rosenberg, M. (1965) *Society and the adolescent self-image*, Wesleyan University Press.
- 菅佐和子 (1984) “SE (Self-Esteem) について,” 看護研究, 17, 117-122.
- 鈴木有美 (2002) “自尊感情とウェルビーイングからみた大学生の精神的健康,” 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 49, 145-155.
- 東京都 (2009) 引きこもる若者と家族の悩み－平成 20 年度若者自立支援調査研究報告書－, 東京都青少年・治安対策本部。
- 豊田夏奈子, 松本恒之 (2004) “大学生の自尊心と関連する諸要因に関する研究,” 東洋大学人間科学総合研究所紀要, 創刊号, 38-54.
- 豊田弘司 (2006) “大学生の自尊感情と自己効力感に及ぼす随伴・非随伴経験の効果,” 教育



実践総合センター研究紀要, 15, 7-10。

古荘純一『日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのかー児童精神科医の現場報告ー』, 光文社新書, 2009年。

星野命(1970)“感情の心理と教育(2),” 児童心理, 24, 1445-1477。

山田素行, 水野基樹, 芳地泰幸(2009)“組織開発の体験は自己理解の変容をもたらすか?”

産業・組織心理学会第25回大会発表論文集, 91-94。

松井名津, 岩村樹憲, 熊谷太郎, 安田俊一(2014)“松山大学経済学部1年生における『自己の探求』プログラムの効果測定(1)” 松山大学論集第26巻第3号, 49-63。

## 資 料

### ソーシャルスキル

1. ~18. の項目のそれぞれについて, あなたの自己評価に最も近いと思う番号に一つずつ ○をつけてください(5件法)。

1. 他人と話していて, あまり会話が途切れない方ですか。
2. 他人にやってもらいたいことを, うまく指示することができますか。
3. 他人を助けることを, 上手にやれますか。
4. 相手が怒っているときに, うまくなだめることができますか。
5. 知らない人とでも, すぐに会話が始められますか。
6. まわりの人達との間でトラブルが起きても, それを上手に処理できますか。
7. 怖さや恐ろしさを感じたときに, それをうまく処理できますか。
8. きまずいことがあった相手と, 上手に和解できますか。
9. 生活や学習をするときに, 何をどうやったらよいか決められますか。
10. 他人が話しているところに, 気軽に参加できますか。
11. 相手から非難されたときにも, それをうまく片付けることができますか。
12. 生活や学習の上で, どこに問題があるかすぐに見つけることができますか。
13. 自分の感情や気持ちを, 素直に表現できますか。
14. あちこちから矛盾した話が伝わってきても, うまく処理できますか。
15. 初対面の人に, 自己紹介が上手にできますか。
16. 何か失敗したときにすぐに謝ることができますか。
17. まわりの人達が自分とは違った考えを持っていても, うまくやっていけますか。
18. 生活や学習の目標を立てるのに, あまり困難を感じない方ですか。

### 社会人基礎力

今の自分に関して, どのような力や姿勢が身についていると思いますか。以下のそれぞれの力や姿勢について, 該当する番号1つにそれぞれ○を付けてください(5件法)。

1. 自分から物事に進んで取り組む力：主体性
2. 周囲に働きかけ、影響を与える力：働きかけ力
3. 課題達成に向けて確実に行動する力：実行力
4. 現状を分析し、目的や課題を明らかにする力：課題発見力
5. 課題解決への道筋を考え、準備する力：計画力
6. 新しい価値や考え方を生み出す力：創造力
7. 自分の意見をわかりやすく伝える力：発信力
8. 相手の意見をじっくり聞き、相手の意見を引き出す力：傾聴力
9. 自分の意見や立場にこだわり過ぎない姿勢：柔軟性
10. 自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力：状況把握力
11. 社会のルールや人との約束を守ろうとする姿勢：規律性
12. ストレスの発生源に対応する力：ストレスコントロール力

表 13 受講前自尊感情高群のクロス集計表

		逆 転		
		低 群	高 群	合 計
肯 定	低 群	0(-1.5)	9( 1.5)	9
	高 群	16( 1.5)	62(-1.5)	78
	合 計	16	71	87

表 14 受講後自尊感情高群のクロス集計表

		逆 転		
		低 群	高 群	合 計
肯 定	低 群	0(-1.5)	18( 1.5)	18
	高 群	8( 1.5)	63(-1.5)	71
	合 計	8	81	89